

戦後教育史研究の意味

— 『神奈川県教育史 1945～1972 資料編(上)』の刊行をふまえて—



焼け跡に再建された中村愛児園で遊ぶ子どもたち（1946年頃 社会福祉法人白峰会所蔵）

2022年 **6月28日(火)** 12:50～14:20

会場 東京学芸大学東5号館3階 防災学習室

対象 学生・本学教職員ほか（先着10名で締め切ります）

参加される方は大森直樹(omori@u-gakugei.ac.jp)までご連絡ください。参加の可否をご連絡します。

講師

よね だ とし ひこ
米田 俊彦さん

1958年東京生、神奈川で育つ。お茶の水女子大学教員。教育史学会代表理事。主な著書に『総力戦体制と教育』（共著、東京大学出版会）、『教育審議会の研究』4巻（野間教育研究所）、『現代教育史事典』（共編著、東京書籍）、『近代日本教育関係法令体系』（港の人）、『1958年「教員の勤務評定」紛争の研究』（野間教育研究所）、『藤井忠俊著作集』全2巻（共編、不二出版）、『1950年代教育史の研究』（共著、野間教育研究所）



神奈川県教育史の戦後編の編纂は、神奈川県立総合教育センターの事業として、2011年に資料調査を開始しました。そして、この春に『神奈川県教育史 1945～1972 資料編(上)』（神奈川県教育委員会）の刊行にいたりました。戦争は教育にいかなる影響を及ぼしたのか。戦災からの復興期における教育行政と教育現場の歩みから教育界が学び取った教訓は何だったのか。事実を明らかにして、今後の教育に役立てることが求められています。同編集委員会委員長の米田さんに、戦後教育史研究の意義と課題について、これまでのご自身の研究成果もふまえてお話をいただきます。